Taisho Muslin Collection Exhibition

大正毛（モスリン）欺綸（友禅）コレクション展

2018年 8月10日（金）～17日（金）

道の駅「おおむた」花ぷらす館　２Ｆギャラリー

時間　午前10時～午後5時　　入場無料

協力：ギャラリーエスプリ

大正毛欺綸（友禅）コレクション展

金子洋子
みやま市高田町居住

40年近く好きで集めていたモスリンのコレクションです。
自宅にしまいこんでいましたが、このたび見ていただきたいと50点ほどを額装して展示いたします。
コレクションの一部ですがごらんいただけたら幸いです。

日本におけるモスリンとは・・・

運営会社：コマテキスタイル株式会社のＨＰからの引用です。

引用はじめ

綿(めん)や羊毛(ウール)などの単糸で平織りした薄地の織物。それがモスリンです。

綿や羊毛の細番手の単糸を使い平織に製織した薄地の織物です。

名称の起源は、メソポタミヤのチグリス川西岸の都市モスール（現イラク）で製織された薄地の綿布を、アラビア人がこの織物にモセリニ（mosselini）という名称で、各地に輸出しフランスに於いてモスリン（mousselin）と呼んだ事によると言われています。

後にモスリンは、羊毛、綿、レーヨン、アクリルと素材は多種に渡っていますが、日本では、モスリンと言えば、一般的に羊毛生地を表し、他の素材と区別するために本モスリン、メリンス、唐ちりめんなどと呼ばれることもあります。（綿生地は、綿モスリン、絹生地は、シフォンと呼ばれます）染色した無地モスリン、模様を染めた柄モスリンがあります。

もとは綿布ですが、日本には幕末～明治初期に羊毛生地として伝わり、着物・帯・長襦袢など幅広く使われてきました。

現在は東北地方を中心に限られた地域で、袢纏や、祭などでの用途で使われています。

羊毛ならではの弾力と、平織りのなめらかさを持つ毛斯綸(モスリン)は、絹のようにドレープ性に富み、身体によくなじみ、暖かく蒸れにくい素材です。また、発色性にも優れています。

メソポタミヤからヨーロッパ、そして日本に伝わり独自の発展を遂げた毛斯綸(モスリン)は、日本の財産とも言えるものなのです。

引用終わり

大正モスリンと言う場合、大正10年ごろから昭和４年世界恐慌までに製作されたものようです。

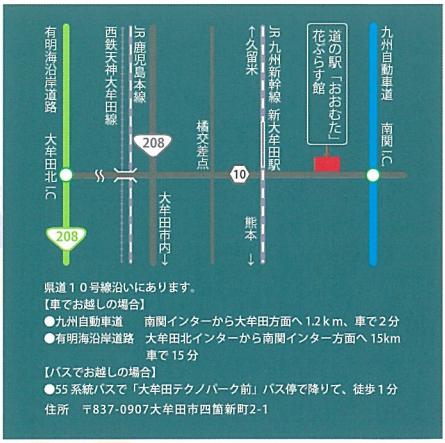
そのころ日本には２７０社以上のモスリンの会社があり、独自のデザインで輸出をしていました。のちにアールヌーボーにも影響し合ったと思われます。

そののち、モスリンには３０㌢のスフの混紡が太政官布告にて命令され急速にすたれました。そののちは安物の布としてのモスリンしか人の記憶にはないでしょう。

モスリンには華やかで高価な時代があった。

私金子洋子は、そう思いコレクションの一部ですが見ていただきたいのです。

大牟田は特に石炭で栄えた時期に、妻や娘にモスリンを買った甲斐性のある男たちがいた。そう思っています。



問い合わせ　道の駅「おおむた」花ぷらす館　0944-50-1187　9:00～18:00
金子洋子　090-2619-6792　10:00～18:00